

日産プレジデント基金

～被災地の子どもたちに笑顔を～

Newsletter

VOL.1  
2013.6

日産プレジデント基金は、日産自動車株式会社社長カルロス・ゴーン氏が発起人となって募った寄付金を活用し、東日本大震災で被災した子どもたちの笑顔を取り戻すためのプログラムを、日本NPOセンターが多分野のNPO、児童館、学童保育と連携し、実施するものです。岩手県、宮城県、福島県の児童館、学童保育を対象に「あそびプラスOneプログラム」と「おでかけプログラム」の2種類のプログラムを2011年7月から実施しています。

このNewsletterでは、各地で開催されている「あそびプラスOneプログラム」と「おでかけプログラム」の様子をご報告します。震災から3年目を迎えた現地の子どもたちを取り巻く状況について知っていただき、今後の支援について考える機会となれば幸いです。

### ●あそびプラスOneプログラム

子どもたちの日常的なあそびの拠点である児童館に、多様な専門性を持った県内外のNPOが訪問してプログラムを提供するものです。通いなれた児童館の専門職員による安心して遊べる環境づくりは、子どもたちの心身の安定にもつながります。子どもたちが普段できない活動を体験でき、職員も力づけることができる支援を目指し、全国の児童館のネットワーク組織である児童健全育成推進財団と連携して、児童館の側が「やりたいこと」「今、必要なもの」を「選ぶ」という姿勢を大切に丁寧に対応しています。2011年7月から2012年9月までの第1期には、21のNPOが100ヵ所の児童館にプログラムを届けました。2012年12月から始まった第2期にも100個のプログラムを実施する予定です。

### ●おでかけプログラム

被災してから、自由に外で遊ぶことが制限されたり、フィールドに出る機会が激減している子どもたちに、長期の休暇を活用して、フィールドに出かけ、さまざまな学習や体験、あそびを通じて、元気に過ごせる時間を提供するものです。第1期には14個のプログラムに運営協力しました。第2期は、15個のプログラムを予定しています。

プログラムの実施にあたっては以下の3点を重視しています。

- 1 被災後の子どもたちの安心・安全を確保しつつ、子どもたちの伸びやかな時間を確保すること
- 2 被災地で子どもの支援に取り組む組織やスタッフの元気を取り戻すプログラムにすること
- 3 県内、県外の被災地支援をしたい団体と地域の子どものつなげること



## あそびプラスOne プログラム



# おやこでカスタネットづくり

仙台市田子児童館／特定非営利活動法人 水守の郷・七ヶ宿

仙台市田子児童館では、特定非営利活動法人 水守の郷・七ヶ宿と連携して「おやこでカスタネットづくり」を2013年5月25日に実施しました。小学校1～5年生の親子20組が参加し、間伐材でカスタネットを制作してリズムあそびをして楽しい3時間を過ごしました。

児童館職員の齊藤寿一郎さんは「親子を対象とするプログラムをきっかけに、もっと地域の力を集めて、子どもたちにいろいろな体験をさせたい」と、プログラムに込めた思いを語っていました。



佐々木館長の挨拶で始まったプログラムでは、最初に、水守の郷・七ヶ宿の海藤節生理事長（通称 海ちゃん）とスタッフのたかちゃんから、水源と間伐材について、紙芝居風にお話がありました。子どもたちは時々投げかけられる質問に恥ずかしそうにしながらも熱心に聞き入っていました。次に、子どもたちは種類も硬さも太さも異なる間伐された木の枝の中から好きな木を選んで、ノコギリで1cm幅を切り出しました。真剣なまなざしの子どもたちの手に親御さんが手を添えて一緒にノコギリを引きました。

ノコギリ体験が終わったら、いよいよ、カスタネットづくりです。予めカスタネットの形に切った2枚の杉板にキリで穴を空け、ヤスリで形を整えてゴムひもを通して、スタンプで名前を押してできあがり！

キリがうまく使えなかったり、ひもを反対に通してしまったりと、子どもたちは悪戦苦闘。最初は子どもに任せておこうと思っていた親御さんも、徐々に作業テーブルに前のめりになっていきました。

しばらくすると、カスタネットを完成させた3人の2年生がリズムをつけて名前を言い始めました。その自然発生的なあそびを目にしていた海ちゃんは、全ての子どもが完成させた頃、3人が生み出したリズムあそびをみんなに披露するようお願いしました。「君の自慢は何ですか?」「ぼくの名前は〇〇〇。ぼくの自慢は足が速いことです」「いいね、いいね、それいいね」…3人のあそびは短時間で進化していました。

その後、息を吹き込んで振動させる楽器カズーで海ちゃんが奏でる『上を向いて歩こう』にあわせて、全員でリズムあそびをしました。

最初に切り出した枝の輪切りは、穴を開けてもらい、ビーズを使ってストラップを作りお土産にしました。子どもたちは笑顔一杯で、自分がつくった2つの工作物を手に帰路につきました。親御さんたちからは「子どもが児童館でどんな風に過ごしているのか、様子がわかりました」「ノコギリが上手に使えるようになっていて、子どもの成長を感じました」との感想をうかがいました。



### 特定非営利活動法人 水守の郷・七ヶ宿

仙台市を含む7市10町の約183万人の水がめ「七ヶ宿ダム」の役割と魅力を伝えるため、都市住民が森林や木に触れ合いながら学べる場を提供しています。あそびプラスOneプログラムでは、間伐材を使ったカスタネットづくりを、児童館のニーズにあわせてカスタマイズして届けています。海藤理事長は「私たちにとって児童館での活動は川下を知る上で大切な活動です。あそびのない学びではいけない。学校での学びと、生活やあそびをいかにつなげるかは、周りにいる大人の育てる能力にかかっているのです」とNPOと児童館の連携の意義を語られています。

## おでかけ プログラム



# 福島の子どもたち香川へおいでプロジェクト 2013 春休み保養プログラム

特定非営利活動法人 福島の子どもたち香川へおいでプロジェクト

小学校4～6年生を中心とした総勢31人の子どもたちが2013年3月24日～4月4日の12日間にわたり、香川県的小豆島やさぬき市志度で思いっきり遊んで過ごしました。

理事長の伊藤さんは、「私たちは子どもたちにとって、普段は会えないけど長い休みになると遊びに行ける、遠くに暮らす親戚のような存在になりたいんです。」と語り、子どもたち一人ひとりの顔や声が香川で暮らす人々に実感をもって定着していくような、息の長い支援を目指しています。

子どもたちは、魚釣りにハイキング、ピザ作りに乗馬体験といった様々なイベントはもちろんのこと、イベントがない時も、庭や近くの砂浜で友だちやボランティアの方たちと一緒に思いっきり遊びました。たくさん遊んで、たくさん話して、たくさん笑って、たくさん食べる。寝る時間になってもおしゃべりは尽きません。遊ぶだけではなく、毎日の当番を決め、部屋の掃除や配膳の準備、後片付けも自分たちで行いました。自治会の集会場を提供してくださったお礼に、地域の方に自分たちで焼きそばを作ってふるまいました。



地域の方へ焼きそばを作ってふるまいました

子どもたちを支えたのは、多様なボランティアの方でした。近所に福島の子どもたちが来るということで地元の方が多数参加されました。中には、車で1時間かけて駆け付けた年配の方もいました。高校生や大学生と一緒に汗を流し、子どもたちのあり余るエネルギーを受け止めるだけでなく、子どもたちの様子など積極的に意見を出してくれました。その他にも、調理士や幼稚園の先生などが、それぞれの専門知識を活かしてプログラムに参加され、多くの顔が見える、充実したプログラムになりました。



近くのきれいな浜辺で海釣りを楽しみました。

### 特定非営利活動法人 福島の子どもたち香川へおいでプロジェクト

震災後に活動を始めた団体です。2011年の夏休みに香川県内の有志で集まり、福島の子どもたちの保養キャンプを開催したのをきっかけに、学校の長期休暇を使った保養プログラムを中心に取り組んでいます。講演会やパネル展示会などを開きながら、地元香川で福島に心を寄せる人たちの輪を広げています。



## 東北3県の児童館の状況

財団法人児童健全育成推進財団  
復興支援プロジェクトチーム 阿南 健太郎

児童館をご存じでしょうか。児童福祉施設として0～18歳までの子どもたちのあそびを通じた健全育成活動と彼らの地域生活を支える施設です。午前中は乳幼児親子の子育て支援、午後からは小学生が来館し、夕方からは中学・高校生が居場所として利用しています。

さて、岩手・宮城・福島県には児童館が338館(平成21年10月時点)ありましたが、うち25館が長期的に使用不可能あるいは、津波等で損壊・流出しました。地震発生時は就学児童がほぼ来館していませんでした。また利用中の乳幼児は保護者と帰宅することができ、館で人命に影響することはありませんでした。しかし、学校を欠席していたため自宅で被災、あるいは保護者に引き渡した後に津波により命を落とした子どももいます。

津波によって被災した館では、事業継続が困難な状態が見られました。しかし、そのほとんどが、半年程度の間、放課後児童クラブ(いわゆる学童保育)を中心とする機能を中心としながらも、仮の場所を見つけて事業を再開しました。復旧活動の中でも子どもたちの安心・安全な居場所が求められていたからです。

福島では原発事故の影響により、外あそびの制限(30分、60分だけ等)が続いている館もあります。多くの館では除染を行いました。除去した土が庭に保管されていて、その横で子どもたちが遊んでいるところもあります。その分、室内あそび

を充実させたいのですが、スペースには限りがあります。児童館は外も含めたあそび環境を想定している施設が多く、利用児童数に見合うだけの広さが確保できない状況もあります。そのため、活動が急激に鎮静化しているところもあります。

被災地では地震被害はもちろんのこと、仮設住宅の建設等により、あそび場が激減しています。子どもたちの育ちにとってあそびは必要不可欠なものです。自治体によっては、仮設住宅等への出前児童館(あそびが不足している場所へ訪問する活動)などを展開しています。

誤解を恐れずに書くとすれば、東北の子どもたちは元気です。被災地だったとしても、子どもたちは毎日生きています。笑顔もあふれ、周りを明るくする力をもっています。震災はそんな彼らのすてきな力を再確認しました。児童館では子どもたちと共に、まちの復興へ確かな歩みを続けています。



東北の児童館で撮影したチャリティ写真集  
「僕らは今を生きている」

収益は全て被災地の子どもたちのために使われます。  
発行：児童健全育成推進財団 1,050円(税込)

編集・発行：



認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター  
〒100-0004 東京都千代田区大手町 2-2-1 新大手町ビル 245  
TEL 03-3510-0855 FAX 03-3510-0856  
Email jncenter@jnpoc.ne.jp  
URL <http://www.jnpoc.ne.jp/>  
Twitter jnpoc

制 作：一般社団法人経団連事業サービス